

現代短歌分類辭典

第四十七卷

津 端 修 編 纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辞典

第四十七卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

昭和五十三年二月十八日起稿

昭和五十三年三月二十七日脱稿

資料カード五五二、六〇〇首の内より

昭和五十三年八月一日発行

著者発行
兼印刷者 津 端 修

〒164 東京都中野区上高田二丁目九の一六
発行所 津 端 修

振替 東京 〇一六七三四一番
電話 〇三―三八七―八四二九番
定価 金一、六〇〇円

(第四十七卷)

歌数	一	八	一	二	一	一	一	一	二	一	二	四	二	六
頁数	九二	〃	九三	九五	〃	一〇一	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二

ありーこそーる	ありーこそぬ	ありーこそし	ありーこそせ	ありーこそすな	ありーこそし	蟻子	同	同	同	ありーけん①	ありーけれーば	ありーけれーど	同④	同③	同②	ありーけれ①
---------	--------	--------	--------	---------	--------	----	---	---	---	--------	---------	---------	----	----	----	--------

一 一 一 一 四 一六 三 六 一 六 三 四 二 一 一 七 八

〃 一四 〃 一四 一三 〃 一三 〃 〃 一三 一四 一三 一〇

同	同	同	同	同	同	ありーし①	阿里山鉄道	阿里山中	阿里山	ありさりーて	ありさりーて	有様	ありさうな	ありこりーて	ありごもる	ありーこそ
⑦	⑥	⑤	④	③	②	①										

一 一〇 三 一 一 二 一、四七 一 一 三 一 三 一〇八 四 一 一 一五

一六 一五 〃 〃 一三 一三 〃 〃 〃 一五 一五 一五 〃 〃 〃 一四 一四

ありーし⑧
同 ⑨
ありし
ありーしかーど
ありーしかーども
ありーしかーに
ありーしかーば
ありーしーごとき
ありーしーごとくに
ありーしーぞ
ありーしーぞーと
ありーしーてふ①
同 ②
ありーしーと
ありーしーとーぞ
ありーしーとーは
ありーしーとふ

九 一 五 五 一 一 一 五 一 五 一 一 四 三 二 六

〃 〃 三六 三三 〃 〃 〃 三三 〃 〃 〃 三六 三三 二四 二九 二六

ありーしーとも
ありーしーなからーに
ありーしーなからーの
ありーしーならーむ
ありーしーなり
ありーしーなれ
ありーしーにーや
有島武郎
ありーしーも
ありーしーも
ありーしーや①
同 ②
ありーしーやーと
ありーしーやーなど
ありーしーやも
ありーしーやら
ありーしーよ

四 一 一 一 四 二 〇 六 一 一 一 一 七 八 〇 三 三

〃 〃 〃 三六 三三 〃 〃 〃 三三 〃 〃 〃 三三 三〇 〃 三九

ありーしーよーと	六	三四九
有栖川切	一	〃
有栖川宮	一	三五〇
有栖川面	一	〃
ありすぎーて	一	〃
ありすぎる①	一	〃
同②	一	〃
ありすさぶ	一	〃
アリストアルコ	一	三五
アリストレス	一	〃
在り澄む	一	〃
アリス・イン・ワンダランド	一	〃
ありーせーば	一五	〃
ありーそ	一	三五
有磯	一六	〃
合計	四、四四	

ありーけむ 【動詞・助動詞の連体形】

宿れりしみづ児はあはれ死に迫る苦しき際もありけむものを①

よき人のありけむ昔おもほえて身にしむばかり夕あかね雲⑤

吉野山苔のとほその夜を寒みひとり病ましし夜もありけむを⑪

わが母もかくてありけむ闇の夜の凜氣しんしん白梅の花①

わが胸もとどろき彼等が現身にありけむ時のものとおもへば⑤

わらはべにありけむときに見和ぎけむ山にしむかへば年とほみかも⑧

吾と相通ずるものありけむ中学よりの親交は彼の死迄変らざりき⑤

釋をさなくてありけむ時のごとくにて麦飯食めば心すがしも⑮

ありーけむ 【動詞・助動詞の連体形】

係りの助詞「か」を受けたもの

いくはくのさちかありけむあま小舟いさみかはしてかへるこゑする②

ありーけむ

浅野 豊子

土田 耕平

佐佐木 信綱

森山 縫子

斎藤 茂吉

安江 不空

金子 不泣

斎藤 茂吉

明治 天皇

ありけむ

うしろより君を衝き飛ばし馳せ去りし連転手彼も酔ひてかありけむ⑥

花田比露思

おん心如何にかありけむ後の世のわれさへ聞きて涙流すを①

花田比露思

癩高に語りし声の耳にあり何処いかなる時にかありけむ⑪

太田水穂

君病みてのちの五とせわれがはに歌よみし子は誰れにかありけむ⑧

與謝野晶子

心鋭くかつは無口の人なりし死期を知りつつ如何にかありけむ①

高橋俊人

この春もたづねおくれぬふるさとの垣ねのさくらいかにかありけむ②

明治天皇

スイスより便りもらひしこともありきスキーの歌の時にかありけむ①

大悟法利雄

ぢんやたてぢんまくぢんぐかためたるげんこうのはるいかにかあるけむ⑦

安江不空

亡き人の臨終のきはの夢に見えし溪の流れは此処にかありけむ⑤

若山喜志子

山嵐かせなまぐさく鬼もなくぬは玉の夜はいかにかありけむ①

蕨 檀堂

ゆきずりに「や」と声かけて頭さげし誰にかありけむ夕闇の道に②

杉田鶴子

ゐのししもまがみも住みし真髻原かりしあとかたいかにかありけむ⑤

安江不空

あり―けむ 【動詞・助動詞の連体形】

かかりの助詞「や」を受けたもの

厚氷この水無月にあらむとは昔の人はしらずやありけむ②

ありし日はひとしほ松のしげり葉の繁くやありけむ君をしぞおもふ⑧

うつくしき祇園言葉に聴き惚れてかへるを忘れわれやありけむ④

老に入る夫を遺してかにかくと思ひやありけむあはれ老妻⑨

おそらく癒ゆるは難しと言はれしときはつかに笑みてわれやありけむ

おどろきて、かれがざえをばまもりゐし、わがあることも、知らずやありけむ⑨

かなしかる命と知らず恋ひはほけ歌ひはほけてわれやありけむ⑩

君が手とわが手とふれしたまゆらの心ゆらぎは知らずやありけむ①

此処にしてつかしし長息^{なげ}松知らば生ひずやありけむ御陵の上に⑫

此山にをさなきみこのおん遊び何かありけむ草と石ばかり②

あり―けむ

明治天皇

若山牧水

吉井 勇

尾山篤二郎

古川不二雄

釈 迢 空

吉井 勇

太田 水 穂

尾 上 柴 舟

小 杉 放 庵

あり―けむ

酒^{さけ}買て浜^{はま}辺にかへるあま人は今日は海さち多くや有けむ①

しばしばも茶をかへしめつ酒たぶる友とありけむ明日香の宿に①

祖母はまだ妻より若く母もやや吾子の^{よま}齡のほどにやありけむ⑤

たぎる湯の釜の松風まちまちし人のころも知らずやありけむ

倒れたる妻を見し時いま思へばおちつき過ぎてわれやありけむ⑩

千里ゆく君かころにいかなれば足とき駒のそはぢやありけむ②

束のまは氣や狂ひけむわれと云ふものの外^{ほか}なるわれやありけむ②

時姫の恋にも涙さそはれぬ思ひあたれることやありけむ⑮

二月八日晴れて生れ日あたたかし生れし日にもかくやありけむ①

母うへよ子らよと呼びし臨終さへきはまるさだめ悔いずやありけむ①

三つ栗のひとつに育ちたりし日も茶飲み菓子食ひかくやありけむ①

あり―けめ 【動詞・助動詞】

東久世通禧

森山汀川

植松寿樹

伊藤左千夫

川田順

與謝野寛

矢沢孝子

吉井勇

清水比庵

臼井大翼

岡麓

あさ日照る海はらみれば神代より永久とこ若くしてこの国はありけめ⑤

中村憲吉

うつし世はかくありけめか年たけておのが生く道ころ定まらぬ⑨

中村憲吉

神つ代の酒の甕にしありけめといふこの甕に椿はふさふ⑬

若山牧水

久形の天つ御空も浮雲のかかる時こそいぶせくありけめ①

天田愚庵

もろこしの李白もかくはありけめと、たのめし人も、いまや世に亡し①

福田夕咲

ありーけらし①【動詞・助動詞の終止形】

あるがなかに泣きの上戸にありけらし酒より醒めて後悔いにけり④

島木赤彦

あるものは黄金のごとくありけらしいまあはれなる菊の花畑⑤

尾山篤二郎

一夏とて精進ひたぶるにありけらしほとほと山は観ずてをはりき⑪

北原白秋

いついつとえは諦めずありけらし消なば消ぬかに末はなんぬる

北原白秋

伊邇之辺もしかありけらし南淵みなぶちのこれの百合の子うまらに饗へて⑨

安江不空

うつつなく幾時われはありけらし紅金剛が甲かぶ高きこゑ①

野村清

ありーけめ

ありーけらし

生まれえて直ぐなりけらし山河のはた険しくやありけらしわれ⑨

かく在りて跣坐し一夜をありけらしその縁の端と思ふに我は⑦

河鹿の声早や聞き馴れてありけらしそれとは聞かず我歩み居り

かなしみはうすれ己のありけらし一年後の父の忌せまる⑤

小米すら親は食はずでありけらし蒸かし馬鈴薯のこのみ褒めぬ⑩

心ふと静寂ほりつつありけらし木炭焚きつくるガスの火の色

そのかみは村の高処にありけらし見えて羨しき湖の上の島④

つきつめてよくよくのことにありけらし銭戴かせ今と云ひつる⑩

土移る桜の花にありけらし夜風うごきて将たしづまりぬ⑧

盗人はおそろしきものにありけらし犬飼ふ多きこの住宅地⑩

藩の世に栄えしさむらひにありけらし血筋といへど昔昔の人③

ひえひえと氣流幽けくありけらしひゆってにゐて滝に真対ふ

太田水穂

北原白秋

依田秋圃

高田浪吉

北原白秋

穂積忠

半田良平

北原白秋

北原白秋

川田順

植村寿樹

柴田重一

はそぼそと母が世過ぎはありけらし黍を攪ぜたる餅の膚よ

松の樹に巢くふ鶺鴒かく低く巢くへるみれば和にありけらし⑧

みひとりにて駆けたまふこともありけらし庭ひろびろと若芽だつ芝②

み仏につかへ楽しむ聖人すらも炉に親します時ありけらし

宮構ここに尊くありけらし石とひとびに地をかこみたる

山住みはたつきか細くありけらしそこばくの稲を屋根に干しつつ

行く秋をこころ惜しくしありけらし黒姫山の麓に住みて①

ゆくりなく来れる法師にありけらし南河内にみ骨うつむる⑧

我が帰る心矢のごとくありけらし早や着きたりと笑ひて泣かゆ⑦

わが病かりそめのものにありけらしあかるき土を歩みつつ居り

ありーけらし② 【動詞・助動詞の連体形】

天つ日の下にあらはにありけらし体を知るや土に挑みつ⑧

ありーけらし

浅野 繁

斎藤 茂吉

山下 陸奥

伊藤 左千夫

小泉 芑三

出口 舒規

高田 浪吉

高田 浪吉

北原 白秋

古泉 千櫨

高田 浪吉

ありーけらし

この岬は昔島にてありけらし水道のあとをわたる千鳥か⑭

川田順

よべ一夜雲ありけらし山のうへのお花畑は露しとどなり④

島木赤彦

われかねて遠きねがひにありけらし京のほとりに行春に逢ふ②

土田耕平

ありーけらし③【動詞・助動詞の連体形】

係りの助詞「ぞ」を受けたもの

くに民のすくなき世には真萩さく野ぞありけらし致るところに②

井上通泰

ありけーり【動詞・助動詞】【歩けり】

我が眼には月の色なる日の照りを雀歩けり庭片寄りに⑧

北原白秋

ありーけり①【動詞・助動詞】

一首の中に二ヶ所あるもの

わた中のかかる島にも人すみて家もありけり墓もありけり①

佐佐木信綱

ありーけり②【動詞・助動詞】

結句止

アイヌらがくむ酒壺を片照らし船室のほか暗くありけり①

暁の鏡にうつる雲のかげ風さわやかに吹きてありけり①

あかつきの霞じめりに来て舞へる翅もとををの蝶にありけり②

あかつきのかねにねざめてみはてぬをうれしとおもふ夢もありけり①

赤穂の猛夫が伴は唯一事生命を賭くることにしありけり⑨

赤松の野べをかへればあらはるこの頃の月はすみてありけり

赤松の丘より見ゆる山川のはざまに青梅の街はありけり

秋風へ あたまの奥にちさき骨 くだけたるらん 音のありけり

あきかぜのすずしくなりし夕にもまだかやりたく宿はありけり①

秋草の花さく野路に拾ひつる藪陰小星やさしくありけり①

秋寒き甲斐の遠山岡の上の穂薄の中にうもれてありけり④

ありーけり

金坂花影

富岡冬野

小田観螢

昭憲皇太后

尾山篤二郎

米田雄郎

上山幸子

宮沢賢治

明治天皇

太田水穂

佐佐木信綱

ありけり

秋雨の伯母が簷端のつれづれは粉石臼をひくにありけり

森山謙一郎

秋空の澄みふかくしてうかうかと怠けしことの楽しくありけり①

植松寿樹

秋空は澄みてさやけし珍らしい心明るき日にしありけり⑤

佐佐木信綱

秋田なる男鹿のしま山きてみれば波のうがちし岩もありけり

遠山英一

秋の野のちぐさの花にくらぶれば染めなす色は限ありけり①

明治天皇

秋の日の飛鳥路ゆけばさわやかにすすきの穂みなゆらぎてありけり②

西郷春子

秋晴れの原っぱのあしたしらじらとトラクラインひかれてありけり②

米田雄郎

悪夢よりさめたる我は拍子木を夜番と知るにいとまありけり④

半田良平

明けそむるあしたは寒き軒つららおもへば遠き空にありけり①

米倉久子

朝来たり、ふたたびとほる雪のうへに、鳥の足がた、みだれてありけり

釈迢空

朝霧の深く籠めたる朝にて二百十日もおだしくありけり③

中沢庭柯

朝明より今日はすることみなよろし思へば母の日にてありけり①

清水比庵